

(論 文)

## 家族介護における介護者の意味づけ

— 象徴的相互作用論からの試み —

山 口 光 治

キーワード

家族介護      介護者      意味づけ      象徴的相互作用論      清算

### I. はじめに

高齢者へのソーシャルワーク実践に関わり、多くの高齢者や家族と出会うたびにさまざまな感情を抱くことがある。ひとり暮らしの気丈な男性高齢者に出会った時は、一人で暮らさざるをえなくなった境遇にもかかわらず、たくましく生きる生き様に驚き、義父母の介護を終えた女性の話を聞く中で、嫁いであら介護する状況に至るまでの家族関係の変遷を知り、なんともやるせない複雑な気持ちとなった。そして、出会った人々に共通していたものは、それぞれの暮らしや介護などには各々によるその行為の意味が存在し、そこで本人なりのストーリーが形成されている点であった。例えば、「親の世話」という表現のなかには、「あの親の面倒を私はみない。さんざん嫌われてきたから。」とか、「自分を育て、苦労した親だから私が世話をするのは当たり前だ。」とか、それまでの関係性や関係史によって各々の意味づけが異なっていた。まさにそれは、主体的存在としての人間、個人が自分の日常で出会う事象に自分の枠組みをあてはめてその行為の意味を解釈し、またさまざまな体験による相互作用を通してその意味を修正している結果であると理解することができる。

このことは、ソーシャルワーク実践における家庭内介護を担う介護者理解の際に参考となる。さらに介護体験に限らず高齢者への虐待と思われる行為の理解においても、ソーシャルワーカーが第三者的立場で当事者の行為を捉える捉え方や枠組みだけでなく、当事者の視点から捉えていく必要性を示唆している。そして、それはソーシャルワーカーが介護や虐待の問題を単に客観的、科学的に捉えるあまり、当事者の痛みに対して鈍麻になってしまうことへの自戒を促し、当事者の主観的立場、つまり人間の主体的側面である行為の意味と意味解釈を重視することの大切さを意味している。さらに、それはこれまでの介護問題や虐待問題に  
1  
関与してきたソーシャルワーカーが、当事者自身によるその行為や問題状況への解釈ではなく、援助者側の解釈を一方的に押しつけて判断してきてはいないか、また、行為者の立場に立ってその内的側面を明らかにしてきたのか、という自らを含めた批判的検討の必要性を提起することへとつながる。

本研究では、家庭内で介護をしている介護者という当事者の視点から高齢者介護を捉え直し、介護者の介護における意味について焦点を当てていく。意味とは社会的なものであり、社会一般の共通な理解や相手と自分とが共通してわかっているという意味の共通性をもつ。つまり、主観的なものは介護者と高齢者との間で新しい意味ができていくのであり、社会における意味がさらに付与されると考えられる。このような考えは象徴的相互作用論 (symbolic interactionism) に理論的基盤をおいている。船津 (1995: 5) によると、この理論は人間を「機械や動物とは本質的に異なり、人間は刺激を主体的に受け止め、解釈することができ、またそれを修正し、再構成しうる積極的、主体的存在である」と捉えており、介護者の高齢者介護に対する意味づけも介護者と高齢者との間の関係性の中で作られ、変化し得るものといえる。

本稿では、高齢者及び介護者へのソーシャルワーク実践の中で介護者の介護の意味を知ることがなぜ必要かを明らかにするため、高齢者を介護している3名の家族介護者へのインタビューを通し、各々の介護者による介護の意味づけを知り、その考察を通して介護における関係性について検討を進めていく。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 調査の対象と方法

本調査は、現在、高齢者介護を行っている家族介護者を対象に、介護の主観的意味づけという介護者の心の内側、内面をその「語り」を通して明らかにしていくものである。そのため、質的研究法の半構造化インタビューによる実証的データを収集することにした。

インタビュー対象の介護者は、本研究の協力体制が構築されている千葉県X市役所福祉課の協力により紹介いただいた市内在住の3者とした。そして、3名を一人ずつインタビューする形式ではなく、3名が一緒に他の介護者の話を聞くグループ・インタビュー形式を採用した。その理由は、介護者同士の相互作用を促進し、1対1のインタビューでは得られにくい介護の思いを収集することができると考えたからである。しかし、この方法で実施した場合に、各介護者のプライバシーに触れる口頭データが他の介護者に知られることから、一定程度、発言内容が制限されたり、他の介護者が同席しているという緊張感で語りが制限されるのではないかなど危惧する点はあったが、むしろ他の介護者の話に刺激を受けて語りが促進される相乗効果を期待した。これについては、社会福祉実践におけるセルフヘルプ・グループの活動事例からわかるように、同じ問題を抱える者同士が、その悩みを共有し、語り合うことにより「自分の問題が何かを見きわめ、自分のニーズをはっきり自覚することによって、人は当事者になる。」(中西、上野 2003: 197) ことを促進し、自らを主権者として位置づけることにつながり、抱えている問題への思いの主張を促進する効果が期待できると考えた。

- 2 調査は2006年2月15日、千葉県X市デイサービスセンター会議室にて、午前10時から12時までの間、筆者がインタビュアーとなり実施した。インタビュー中の会話は、介護者の同意のうえで録音し、後日、口頭データを文字変換してテキスト化した。

### 2. 調査項目

インタビュー調査は、協力者に対して調査目的を説明し、録音する許可を得、その口頭データを文書化する際には氏名をはじめ固有名詞を記号化したり、年齢を加工するなどの倫理的配慮を行うことを説明した後、実施した。

インタビュー内容は、各介護者の介護への意味づけを明らかにするために、主として現在の介護状況（誰を、いつから、どのように介護しているか）、これまで介護してきた苦労について、被介護者と介護に対する思い、介護体験から学んだことを柱として、半構造化インタビューを行った。詳細な質問項目は設けず、介護者の語りに注目し、自らの思いを自由に語ることに介護への意味づけが表れてくると考え傾聴することにした。ただし、介護者はインタビューを聞いている者を意識して語っていること、つまり、相手によって語ることが変化しうる可能性があることを留意したうえで実施した。しかし、この点はグループ・インタビュー形式により、自分と同じ立場である介護者が聞く側にいることで当事者意識の共有が生じやすく、むしろ介護への思いが率直に語られることを後押しするのではないかと考え実施した。

### 3. 分析方法

文字変換された口頭データは、逐語録として記録し、介護者の介護への意味づけが読み取れる会話内容の記述部分を取捨選択し、データの解釈を行った。解釈にあたっては、象徴的相互作用論の理論を手がかりに、3名の介護者の基礎的データを基に一事例ずつ行った。

象徴的相互作用論は、象徴を通して人間の相互作用過程に焦点をあて、人間と社会との関係における問題を明らかにしようとする理論で、1960年から1970年にかけての米国において注目された。そこでは「シンボリックな相互作用を通じて、人間は、いわゆる『社会的存在』となり、他方、このようなシンボルを通じての相互作用過程において、人間は自我を形成し、それによって他者に働きかけうる存在となる」（船津 1976：1）とされている。そして、この理論はT. パーソンズを中心とする機能主義理論への批判を通して人間の主体性の問題を強調した。本研究においては、G. H. ミードらの影響を受けてH. ブルーマー（ブルーマー〔後藤訳〕1991）によって提唱された象徴的相互作用論<sup>\*1)</sup>を理論的枠組みとして取り上げる。

## Ⅲ. 調査結果

調査結果については各事例ごとに、事例概要、介護の意味づけに関する口頭データ記録部分（「」内は介護者の発言部分、その中の波線部分は介護の意味が読み取れる部分。〔〕内は筆者の発言部分である）をあげ、データの解釈を行った。なお、口頭データは膨大な量であり、ここでは該当する一部分を会話順に沿って取り上げた。そのため必ずしも前後の文脈が一致していない部分もあることを申し添えておく。

### 1. 事例1：姑の介護をするA子（70歳）の事例

#### (1) 事例概要

A子は、夫、夫の母親（96歳）、子ども（次男）との4人暮らし。同居する姑の介護を12年間続けている。姑は1994年頃より認知症が始まり、大便を漏らしたり、それを押入にしまうなど部屋を汚す行為がみられる。夫は勤めていた時には介護に手出ししなかった。また、3母親が衰えていくことを辛く感じている。しかし、2000年に退職してからは介護に協力し、二人で行っている。同居している次男は、おばあちゃんの汚れ物を洗ったり、入浴に関しても近くに住む長男と交代で介助している。A子は非常勤で仕事をしている。姑は要介護5で、必要に応じてショートステイを利用したり、週に2回デイサービスを利用している。

#### (2) 口頭データ記録

「あの、私も平成8年に退職だったんですね。平成8年退職の時に、送別会を、まあ、結

構、大掛かりに皆さんひらいて下さった時に、母にいろいろお世話になっているから、退職した後は、もう、母の面倒をみますって、みんなの前で宣言をして。私もお母さんに世話になったから、嫁としてお返しなかったらバチが当たるわ①って、もうそういう思いが強かったんで。まあ、うんちしてそうやってお掃除するのも、お母さんそういうふうにしなくて、年取ったらそうなるんだから、とか言っても、また母も腹立つようで、言うこと聞かないんですよ。ああ悪かったねとかって一言言えば気が済むのに、どうして言わないだろうと思って、もう二人で毎朝大ゲンカじゃないですけど、今までもお母さんには何にも言わずに、まあそれなりにだったんですけど。②考えると、いやあ、お母さんがボケ始めたからって、言いたいこと言って悪いなあ。いやあ、今までもお母さんが元気なうちに言いたいこと言えば良かったのに、そういうこと言わないで、お母さんが弱ってきた時にこうやって言いたいこと言うっていうのは、申し訳ないなあっていうのは、すごい思いましたね。③」

「うちの夫もやっぱり私のそういうの（介護の苦労）見ているのがつらいから、おばあさんを、老人ホームに入れたほうがいいんじゃないかって。老人ホームに入れたほうがいい、もうこんなになったら老人ホームに入れたほうがいいって。私は嫁の意地で、いやもう絶対みるわ、最後までみなきゃ私のあれがすまないから、絶対みたいって、思ってた④。そんなことがいろいろありましたけど、その中で、あの、K病院でしたかしら、S先生のご講義を、平成8年、退職の時に伺ったんですね。で、その時のお話が、すごいためになりまして、ま、第一期っていうのは戸惑いと否定の時期なんだよっていうのを、例をもっていろいろお話を伺って、第二期というのが混乱と怒りと拒絶っていう時期なんだっていうことを伺いましてね、目からうろこって感じじゃないですけど、ああそうなんだ⑤と。ボケた人にはいくら教えてもダメなんだっていうのがすごくわかったんですよ。おしめなんか汚れたのを、あのう、あの、ちゃんと包んで捨ててねって言っても、ちっとも言うこと聞かなくて、ええ出来るわよ、後でやるからいいのよって。どうしてお母さんやらないのよって、そしたらS先生からボケた人にはものを教えてもダメなんですって、言うのを伺ったんですね、ものを覚えられないんですよっていうのを伺って、ああそうか、だからいくら言っても出来ないんだから、そういうのはいけないことだったんだわ⑥っていうのをとっても思いましたね。それで、第三期はあきらめの境地ですよっていうお話で、今はあきらめと受容が半々ですね。で、この頃、やっぱり流れっていうのがあって、その、お母さん自身も混乱してたんだと思うんですけど、そういうのが終わりまして、8年、10年くらいになってからは、もう口もきけなくなってきましたし、もう、だいぶおとなしくなっちゃって、おとなしくなったっていうか、ただ、あ、もう、口ほどにものを言い、すごいやっぱり嫌なことは恨めしそうな顔して言ったりするんで、ああつらいんだよなあとか。この頃はですね、あんな元気で一生懸命やってくれたお母さんなんだもん、いやあこうなったらつらいだろうなあ、そういうふうに思える⑦そういう自分が今は嬉しいかなあって思います。」

4 「やっぱり、お世話になったんだから、自分がみたいって、みなくちゃって⑧」  
[義務、義務感っていうか]

「そうですね、やっぱり、子ども二人を一生懸命育ててくれたお母さんなんだから、やっぱり、大事にしくっちゃってっていうか、気持ちが強かった⑨、それが強かった。」

### (3) データの解釈

この事例は、夫の母親を、嫁として介護している事例である。このデータから、以下のことが読み取れる。

まず第1に、波線①⑧⑨からわかるように、A子は姑に自分の子ども（姑からすると孫）の子育てを「世話になった」し、「一生懸命育ててくれた」というお礼や恩から、姑への介護に対して「お返し」と捉え、「大事にしなくては」という気持ちを抱き、自分が介護するという役割を引き受けていることが伺える。つまり、A子にとっては借りのある子育てに対する恩返しとしての介護という解釈が成り立つ。

第2点として、波線①④から「嫁として」とか「嫁としての意地」という表現から、嫁であるが故に夫の親の面倒を看るべきであるという「嫁としての介護」という役割取得をしていることが解釈できる。それは、老人ホームへの入所話が出た際の発言であることから、A子を取りまく人々が嫁のA子に対してどのような役割期待をしているのかを意識したものであり、嫁と姑との関係に対するA子の意味づけを読み取ることができる。そして、それは嫁が姑の介護をすべきであるという未だ残る社会規範をA子自身が引き受けているといえる。

第3として、波線②や③のように、A子が姑への介護を戸惑いながら、言いたいことを言い、また言い過ぎたことを反省するといったことを繰り返していた介護が、ある研修で聞いた話を契機に、波線⑤⑥のように認知症について学ぶことによって「ああそうなんだ」と気付きが生まれ、今までの介護についての反省が促され、波線⑦のように「こうなったらつらいだろうなあ」と相手の気持ちを思えるように変化してきたことが読み取れる。このことは、A子が認知症に関する正しい知識を持つことによって、認知症の姑の介護に対する解釈が変わったものである。それは、決して姑の症状が変わったわけではなく、A子自身が知識を得ることで変わったのである。つまり、人間は新たな知識や情報を持つことで、その行為の意味を変えるきっかけを得て、意味を変えていくことができるといえる。

## 2. 事例2：夫の介護をするB子（70歳）の事例

### (1) 事例概要

B子は、夫（76歳）と長男との3人暮らし。夫の介護を25年間続けている。夫は51歳の時に仕事場で脳内出血により倒れ、身体障害の1級である。そのころよりB子が付き添ってリハビリテーションに励むが排泄の失敗が多く、8年前からADLは全介助でねたきり状態となり、現在、要介護5で自分の力では身体を動かすことができない。また、胃ガンも併発している。B子曰く、「病気に対して無知だった」と話している。介護は、長男が入浴させたり、浴室に手すりをつけたり、すのこを作ってくれるなど協力している。結婚して他県に住む次男も、子ども（孫）を連れて来たり、電話で話をするなど支えている。B子は家計を支えるために、介護をしながら1日2～5時間の仕事をしていた。デイサービスを週2回利用しているが、ショートステイについては夫が利用したいと言わないので利用せず、B子の介護が都合つかない時は、長男が仕事を休んで面倒をみるなどしている。

### (2) 口頭データ記録

「主人が25年前に倒れて、倒れた時に、私達、あのう、家買って3年目だったんですね。で、どうしようっていう気持ちの不安と、なんとか主人を歩けるようにしなくちゃいけないっていう、その葛藤はありました。①で、一生懸命病院から退院してから、毎日毎日少しづつ歩く練習して。それと、家の前の、どこになるのかなあ、車道と歩くところの間に、あの、鉄のあれがありますね。あそこに掴らせて、立って、座って、一歩二歩から始まって、あのうお父さん今日はここまで歩けたから、今日はおしまいって、それを半年くらいやってね、そうやって少しずつ、歩いてきましたね。そして、もう、自分の家の中も、大変だけど、まず、でも主人をなんとかしないとどうしようもないから、んん、ちゃんと、家の中全部、こ

う、息子があのおう、手すりつけましたから、それをつかまって、トイレへ行ける、お勝手へ行って食事ができるっていう最低のことはちゃんとしないといけない、それをじゃあ、やって、それで、なんとか留守番できるようになってから、2時間くらいずつの仕事をみつけて働いて。」

「自分で上手く拭けないんです。お母さん汚くてしょうがないんだって（息子に）いつも、それはもう言われましたんで、ごめんねって言って、すぐ、来て、まず、夕飯のおかずの用意よりは、そこを整理してから、ごめんねって言って整理してから、夕飯の仕度して、その時にはお父さんには何も言いません。絶対、言わない。お父さんだって失敗したんだから、可哀想だなあって思って。②んん、私は居てあげられればいいんだけど、やっぱり、家の事情で居られないんだからね、そこは、もう、何も。そして、少しいい時期があったんですけど、平成10年に倒れてから、寝たきりになっちゃって。」

「どうしたらねえ、この人を元気にしてあげられるのかなあって気持ちだけでもうずっときちゃった③から。それで、自分がふっと、寂しくなるつつうかなあ。あのおう、やるせなくなる気持ちって時は、お花咲いて、お花買ってきて、あのおう、ちょっとお花、あれしてみたり、そういうので、自分で慰めて。」

「私は私なりに、60までは何とか少しはあのおう、ねえ、仕事出来るかなあっていうのが、自分でねえ、考えていましたよ。ううん、そしたら、突然51歳で倒れちゃって、それから、ああどうしよう、家は買ったばかりなのに。これからどうしたらいいのかなあっという、不安がこう頭ん中ありましたけど、次の日まずお父さんを、なんとかしなくちゃいけないんだって、家なんかもうどうでもいい、なくなったらなくなったでいいってふうに、頭ん中で切り替えちゃって④。でも、なるべくならこの家でお父さん看取ったりなんかしたいから、何とか自分で、頑張っていける方法がないかなあって、そしてまあ、一生懸命お父さんに、一年間だけはもう一生懸命訓練して、毎日、それこそ、雨と風の日以外は毎日、あそこ、手すりを持ち持ち歩いたり、いつも駐車場の中を歩いたり、少しづつ歩いて、ねえ、でまあ、お風呂、お風呂はあのおう、その時は、息子がちゃんとすのこ作ってくれました。」

「私、いろんなことを、んん、ぶつかって、んん、そんな時はじめて、ああこういうこと起きた時にはどうしたらいいのかなあって、自分で、自分なりに考えるんです⑤。ええ例えば、寝返りさせて、お尻の穴を、始末をしますね、薬を塗ったり、消毒したりする時に、おしっこひっかけられたり、おしっこひっかけられた、ああおしっこひっかけられた、ああいけない、じゃあこういう時にはこういうふうにしておいてって。あのおう、尿取りなんかも、こういうふうに、ちゃんとくるんで。ですけど、私がやっている間に外れちゃうことあるんですよ。そういう時、ああそうか、こんな風にやってたんじゃダメなんだ。じゃあこっち側に、ぼろのバスタオルできゅとして、自分でこういうふうにしても引っかからないように、すればいいんじゃないのかなあと思って、いろんな失敗したのをもとに、こういう時にはどうしたらいいのかなあというのを、自分でそういうふうと考えて⑥。」

6

〔工夫を？〕

「ええ、ええ。今までずっと、やってきましたねえ。ええ。その時、ああ25年前に倒れた時は、ああいうふうに乗り切れたんだから、今はガンでもうあれだけれども、どれだけ、主人が命保ってくれるかわからないけれども、主人も一生懸命頑張っているから、私もどれだけ頑張れるか、あまり肩肘張らないで、あのおう、自分がやれる範囲のこと、どれだけしたら悔いにならないし、どれだけしたら、あのおう、いいかなって、そういう考えでした⑦。う

ん、それしかないですね。ええ。」

「あのう、こういうこと起きちゃったけど、夫婦関係どういうふうにしたら、あれかなあって、自分がお父さんの立場でね、こんなに、ただれたり、あのう痛い思いだったらどうも我慢できないけれど、それを我慢してんだから、あのう、到底なんか、言えないし、言っちゃいけないなあと思って⑧、だから、そういうことに対しては言ったことはないですね。」  
[あのうちよと一つだけお聞きしたいのが、ご主人と結婚されて、51歳で倒れられるまでっていうのは、やっぱり仲がいいご夫婦でいたんですか。]

「私あのね、振りかえってみたらねえ、主人は家庭を大切にしていた人ですね。子どもも、自分の時間の許す限りは、どこかへ、例えば、上野動物園とか、あのう・・・園とかってそういう近場でも、自分の時間が許す時には二人を連れて、普段あんたみてんだから、私が連れてくよって、二人連れて行く人でしたね。⑨ですから、こういう感じの人ですから、お父さんは働いてこうなったんだからっていう、そういう頭が片隅にある⑩からねえ。あの目が、とても優しい目をしてんですよ。すると目を見ちゃうとね、ああ、可愛いなっていう、今は夫っていう気持ちじゃなくて、ちょっと、こ、子ども、子どもってまではいかないけど、あのう、存在の感じですよ。愛しいというか、夫じゃないですよ、もうね。夫じゃないけど、目を見たり、こう何かしてあげてる時、愛しく感じるんですよ⑪。そうするとね、あのう言葉ではあれだけど、頭こうやって、私の頭に、下（しも）なんかこうきれいにさっぱりして。すると、順序があって、体温を測って、血圧を測って、下をやって、下を終わると私はいつも、あの、主人はあのう、お茶飲んではいけなから、麦茶ですから、麦茶の温かいのを150くらい飲ませると、一生懸命私の頭をこうやってね、言葉で言えないものですから、ありがとうっていう意味なんですね。で、あのう、頭こうやって一生懸命、自分の調子がいい、体の調子がいいときはこうやって頭をなでるんです。ああ、そう、嬉しいのって言って、黙ってますけどね⑫。」

### (3) データの解釈

この事例は、夫に対する妻の介護であるが、夫が働き盛りの51歳の時に倒れ、それから25年間の長期にわたり介護しており、高齢期に介護が始まった事例ではない。そのため、働き盛りの時期に一家の稼ぎ手である大黒柱が倒れるという、家族にすれば重大な危機を経て現在の介護がある。そのことは、妻のみならず家族それぞれのライフステージにおいてもさまざまな影響を与えてきていることが考えられる。B子にとっては、波線①にあるように突然倒れた時の不安と葛藤を感じながら、波線④のようにお父さんを何とかしなくてはと考えてリハビリテーションに力を注いでいった様子がわかる。

B子の介護の意味においては、第1に、波線②からは夫に対する不憫な思い、波線③からはどうしたら夫を元気にしてあげられるかという思い、波線⑪⑫からは夫への愛しい思いが読み取れ、苦労を共にしている夫婦の愛情があってこの介護が成り立っていることが伺える。またそれは、波線⑦のように「主人も一生懸命頑張っているから私も」という言葉や、波線⑧のように夫の立場に自らを置き換えて考えるということからも、夫婦の絆の強さと夫婦の相互扶助意識の強さが介護の根底にあることを推測できる。

第2に、波線⑨にあるように、元気な頃の夫と妻との協力的な関係が、波線⑩のような妻の夫に対する理解へつながっている点を指摘できる。この部分だけのデータでは十分に解釈することは難しいが、介護が必要になった際に、被介護者と介護者のそれまでの人間関係の歴史は、介護者の介護の意味に影響することが指摘されている\*<sup>2)</sup>。それは決して、単に夫

婦だからとか親子だからという形式ではないものであるといえる。

第3に、B子の介護においては、波線⑤⑥からわかるように、さまざまな工夫をしながら自分なりに「考える介護」をしている点をあげることができる。つまり、創造的な介護といってもよい。長期間の介護を通して、B子はさまざまな介護体験を持ち、多くの介護行為の失敗も経験してきている。その時に、介護をあきらめたり投げ出すのではなく、自分のやれる範囲のなかでもっと良い方法はないかと創意工夫し継続してきたことは、B子の介護の意味において重要なことである。突然発生した介護、その戸惑いの時期を経て、受け入れざるを得ない状況を悟り、逃げ出さずに自分のできる範囲で行っている介護。そのような介護を継続してこられたのは、他ならぬ夫への愛情が根底にあることを読み取ることができる。

### 3. 事例3：実母を介護するC子（62歳）の事例

#### (1) 事例概要

C子は、夫、実母（85歳）、子どもとの4人暮らし。そして、同居する実母の介護をしている。母親は13年前に脳梗塞を発症したが、退院して普通の生活をしていた。しかし、5年前頃より洗濯物の干し方がいつもと違ったり、夜中に起きて押入の物を全部出したり不穏な状態があった。そして、1年前、脳梗塞を再発し、半身不随となり要介護5となる。夫は病院に勤め、介護への理解がある。母親は、月に1回ショートステイを、週に4回デイサービスを利用している。それらを利用しながら、C子は自治会役員や民生委員も担い、また、週2回習い事に出かけている。

#### (2) 口頭データ記録

「うちの場合はですね、自分の母ですので、遠慮がないもんですので、ついつい、前はできていたことが今はできないことに、やっぱり、がっかりしちゃいます。つい、大声出しちゃいます①。後で、ああ、いけないという繰り返しです。やっと、ここんどこ動けなくなって、口が聞けなくなって、ああ、やっぱりそうなんだ、やっぱりと覚悟決まった感じです。やっぱり前と違うんだと。やっぱり、引きずります。②あもう、話せて動けるっていう、あの、今までの動きと違いますけどね。車イスでも、歩ける状態でしゃべるっていう、出来ないとかーッときて、パーっと、普通の通り、ケンカ腰になっちゃうんですよ③。やっとこの1年で、本人ほんと動けなくなって。口も。それまでは、反省とかーってくるのとの、繰り返しです。二人で、そっちも、こうきますのでね、ある程度やるとおさまるんです。それで、ちょっと言いすぎたなあって、自分で反省して④。今は、もう相手から言ってくるから。あもう、悪いことしたなって思って。それから、ケンカにならなくなりました⑤。」

〔カッカした時の対処法は？〕

「あ、なるべく私、外に出るようにしてます。はい、あもう、介護だけじゃないですよ。うちの母が元気な時からたまに自分のやりたいこと、習字と、絵手紙と、卓球くらいやってましたんで、それだけで、まさに、発散できますので。多分、大分違います。⑥週2回出れますし。」

8

〔あ、Cさんご自身が、週2回、習いに行ってるわけですか？〕

「はい。」

〔その間は、ご主人が代わりに介護を？〕

「できるときにみてもらってますけど、だいたい、こうデイサービスに出して」

〔間に、自分もこうリフレッシュを〕

「はい、自治会の役員をしまして、民生委員もしておりますので、意外と外に出ますの



でね、あの、忘れることが多いです。ええ、そういう意味では、大分違うのかなと。⑦」  
 [ええ、なるほど。気持ちを切り替える時間をお持ちになっていたということなんですよ  
 ね。]

「はい」

### (3) データの解釈

この事例は、実の母親を介護している娘の事例である。

この事例では、第1に、実の親子という結びつきの強い血縁関係、自分を産み育ててから今日の介護までに至る同居期間の長さなどにより、波線①や②からみられるような、自立していた頃の母親と現在の母親との生活自立度のギャップを強く感じ、それを受けとめて介護することの難しさをあげることができる。つまり、自分が育ってきた過程においてお手本として存在した母親が、高齢に伴い身体が不自由になり、かつ、理解力が低下してきた姿をどう受けとめたらよいのかという葛藤のなかで介護がなされている。それが時により母親の言動を受けとめられず、波線③のように「ケンカ腰」になったり、波線④のように反省したりカッとなる原因となり、その繰り返しをしているのである。そして、相手が大声を出せなくなり何も反応がなくなることにより、波線⑤のように自らの言動を反省するとともにC子にとっての介護の意味も変化してきたものと思われる。

第2に、波線⑥⑦から、ただし、記載した口頭データからは十分に把握できないが、それにインタビューの際に受けた印象を加えるならば、自分の親を介護しているという親子関係からか、または民生委員という公職を担っている立場からか、介護にのみ自分の生活を埋没させるのではなく、趣味の活動へ参加したり、介護サービスの利用に積極的な面が伺える。つまり、自分の生活を家の中の介護にだけ向けるのではなく、リフレッシュさせながら介護していこうという考えが読み取れる。この点は、義理の親子関係での介護（嫁としての介護）と比べると、実の親子関係であるが故に、自分の時間を持てるように行動するという考えへと割り切り易いのではないかと考えられる。それは、「自分の母ですので、遠慮がないものですので」という言葉からも推察できる。

## Ⅳ. 考察

3事例を踏まえて、介護者による介護の意味づけについて考察していきたい。

### 1. 介護者と被介護者の関係性

今回取り上げた介護者と被介護者の関係は、意図したものではないが嫁と姑という義理の親子、夫婦、母と娘という実の親子であった。そこから言えることは、形式としての親子関係や夫婦関係が規定する扶助や扶養という機能だけではなく、その人間関係が要介護という状態に至る以前から、どのような関係構築をしてきたかということの結果として介護関係が表れてくるといえる。つまり、家族や夫婦における人間関係の歴史の有り様が家族に介護を必要とした時に、家族介護者の介護の意味に影響を与える一因であるといえる。

### 2. 介護者と被介護者の相互作用

象徴的相互作用論に介護を当てはめて考えてみると以下の論理が成り立つ。

介護を一つの対象とすれば、それは高齢者本人、介護者、その介護に関与している専門職などによって、それぞれ異なる意味を持つ。例えば、介護者にとっての介護することの意味は、本質的にその介護者が相互作用する被介護高齢者によって、その高齢者に対してどのように定義されているかということから生じるものである。また、その意味は介護者と専門職

の相互的な援助過程や関わりから、介護者の高齢者への介護の意味を変容させることも可能であるともいえる。つまり、介護者が自ら行っている介護行為は、介護者がその行為のもつ意味により行動しているのであり、その意味は被介護高齢者との相互作用や専門職との相互作用によって形成され、その解釈を通して変化していくのである。

したがって、高齢者介護においては、介護者や高齢者自身の介護の意味づけを知り、当事者の視点から捉えなおし、それが専門職の理解や意味づけと異なることを受け止めながら、相互作用過程を通して介護者や高齢者自身の新たな意味づけやそれまでの解釈の変容を促し、今行っている介護を肯定して受け止めていける支援が可能であると考えてるのである。

### 3. 介護者と被介護者関係を超越した家族関係の「清算」

語りを通して介護者が自己の体験を時間軸のパースペクティブにおいて振り返り、過去から今日に至る高齢者と介護者自身との関係性の解釈を、介護者自身が歩んできた過去と自らの人生の「清算」という概念で整理することができる。

例えば、過去の人間関係を「恩返し」や「お返し」として清算しようと考え、介護が必要な高齢者の生活の面倒を看ることがある。また、愛する夫のために精一杯、できる限りの介護を行うことで、自己の存在意義を肯定し、これまでの夫婦関係の延長上で後悔しない介護、つまり、これまでの夫と自分との関係の総仕上げとして自己が納得のいく介護を行うことで、夫への愛情を全うしようとする場合もある。この考え方を象徴的相互作用論の視点からみると、現在の介護を「過去の清算」として捉えるところを特徴とする。つまり、「清算」は被介護者との関係の清算であったり、これまで歩んできた自らの人生への清算をも意味する概念として捉えることが可能である。

## V. まとめ

高齢者介護に対する介護者の意味づけについて、3名の介護者へのインタビューを通し、象徴的相互作用論をもとに考察してきた。そこから言えることは、介護者は単に家族であるという形式的な関係、社会的な枠組みの中で介護をしているのではなく、自らが主体となり高齢者との人間関係やその歴史性を背景とした各々の介護の意味に基づいて介護しているということである。また、その意味は正しい情報の入手や高齢者との相互作用によって修正され、再構成されうる可能性をもっているといえる。

ソーシャルワーク実践において、このような介護者による介護の意味を知り、理解をして援助にあたることは、以下の点が必要であるといえる。まず第一に、家族介護の個性を理解し、介護者への個別化した援助を実施するうえで不可欠であること。第二に、介護問題への援助において、問題解決の主体はあくまでも介護者であり、それを支援するためにも当事者の視点や思いを大切にしなければならないということ。そして、第三に、介護者の介護の意味は、介護者に不足している情報の提供や他者との相互作用によって変わりうるものであり、10 ソーシャルワーカーが援助関係を通して介護者に関わることで、介護者による介護の意味を修正することができ、さらに介護に関わる虐待や放棄などの問題の発生をも回避することができる可能性があるということ。第四に、介護者による介護の意味を知ることは、①高齢者と介護者との関係の清算や、②介護者自身の人生における清算という視点を持ってソーシャルワーク実践にあたることができるという点をあげることができる。それは、高齢者と介護者のライフサイクルやライフステージを知り、援助にあたることの必要性を意味している。そして、第五に、ソーシャルワーカーが介護者への援助にあたりパターンリズムに陥ら

ないためにも、介護者の主観的側面（介護の意味）を知ることが求められるということである。例えば、専門職が判断し援助したことが当事者の思いとかけ離れてしまい、対等な関係の中で援助が行われずに専門職優位となってまうことなども防ぐことができる。

以上、介護者の介護の意味を知ることの必要性について述べてきたが、今回取り上げた事例は、現在、比較的良好な関係で介護を行っている事例であり、その考察から得られた事項をまとめたに過ぎない。今後は、さらに異なる経過で介護をしている、あるいは介護を拒否している事例なども取り上げ、そのような場合の介護者による介護の意味を知りソーシャルワーク実践に生かしていきたい。

最後に、本研究は淑徳大学平成17年度学術研究助成を受けた研究成果の一部であることを申し添えておく。

稿を終えるにあたり、インタビューにご協力いただいた介護者の皆様、千葉県X市役所福祉課職員及び関係者の皆様に深く感謝致します。

#### 【注】

- <sup>1)</sup> ブルーマーは象徴的相互作用論を次の三つの前提においてとらえている（ブルーマー〔後藤訳〕1991：2）。  
 第一の前提：人間は、ものごとが自分に対して持つ意味にのっとって、そのものごとに対して行為する。  
 第二の前提：このようなものごとの意味は、個人がその仲間と一緒に参加する社会的相互作用から導き出され、発生する。第三の前提：このような意味は、個人が、自分の出会ったものごとに対処するなかで、その個人が用いる解釈の過程によってあつかわれたり、修正されたりする。この三つの前提によって象徴的相互作用論は成り立っているのである。つまり「人間が、おたがいの行為に対して単純に反作用するのではなく、他者の行為を解釈または『定義』しているという事実による」（前掲書：102）という独自性を持ち、「人間社会のいかなる実証志向の図式も、人間の社会がなによりも行為にかかわっている人々からなりたつものだという事実を、尊重しなくてはならない」（前掲書：8）と考えるのである。
- <sup>2)</sup> ここでは被介護者と介護者のそれまでの人間関係の歴史が現在の介護に影響している点を指摘しているが、それが悪影響を及ぼす現象として虐待をあげることができる。この研究分野では、家族間の力関係の変遷が虐待という問題状況を発生させることについて、早くから指摘されている。金子（1987:215-220）は、高齢者虐待を行う加害者と被害高齢者との間にみられる自己中心的影響力の強弱関係の経時的状況から虐待の分類を行っている。

#### 【引用文献】

金子善彦（1987）『老人虐待』星和書店。

Herbert Blumer（1969）*Symbolic Interactionism: Perspective and Method*, Prentice-Hall, New Jersey, U.S.A.（＝1991，後藤将之訳『シンボリック相互作用論－パースペクティブと方法－』勁草書房。）

船津 衛（1976）『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣。

船津 衛（1995）「シンボリック相互作用論の特質」船津 衛・宝月 誠編『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣，3-13。

中西正司・上野千鶴子（2003）『当事者主権』岩波書店，197

【参考文献】

- Uwe Flick (1995), QUALITATIVE FORSCHUNG, Rowohlt Taschenbuch Verlag GmbH  
(=2002, 小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門―〈人間の科学〉のための方法論』春秋社.)
- 片桐雅隆編 (1989)『意味と日常世界―シンボリック・インタラクショニズムの社会学―』世界思想社.
- 金子善彦 (1987)『老人虐待』星和書店.
- Daniel Bertaux (1997), LES RECITS DE VIE:PERSPECTIVE ETHNOSOCIOLOGIQUE, Editions NATHAM, Paris (=2003, 小林多寿子訳『ライフストーリー―エスノ社会学的パースペクティヴ』ミネルヴァ書房.)
- 中西正司・上野千鶴子 (2003)『当事者主権』岩波書店.
- Herbert Blumer (1969) Symbolic Interactionism:Perspective and Method, Prentice-Hall, New Jersey, U.S.A.  
(=1991, 後藤将之訳『シンボリック相互作用論―パースペクティブと方法―』勁草書房.)
- 長谷正人 (1991)『悪循環の現象学―「行為の意図せざる結果」をめぐって―』ハーベスト社.
- 長谷川啓三 (1987)『家族内パラドックス―逆説と構成主義―』彩古書房.
- 船津 衛 (1976)『シンボリック相互作用論』恒星社厚生閣.
- 船津 衛・宝月 誠編 (1995)『シンボリック相互作用論の世界』恒星社厚生閣.

(受理 平成18年9月22日)